

昭和20年頃の第2次世界大戦末期には日本の国粋主義は極限に達し、国民学校（今の小学校）では毎日の朝礼で「われわれは鬼畜米英を撃滅します」と大声で宣誓させられていた。英語はすべてご法度で「ニュース」は「報道」, 「ラジオ」は「受信機」など不自由な時代であった。また、なぜか「蝶々」は「ちょうちょう」ではなく、「てふてふ」と書かなければならなかった。当然、海外からの技術情報はまったく入ってこず鎖国のような状態であった。それが昭和20年8月15日の終戦を境にラジオ英会話の“カムカムエブリボデイ”に代表される英語の世界へと急転した。正に文明開化の感があった。

松村さんは昭和7年生まれであるから多感な思春期や青春時代を含めてこの激動の時代に成長し、朝鮮動乱が終わってようやく諸外国の技術が敗戦国日本に定着し始めた頃の昭和31年に名古屋工業大学を卒業され、極東鋼弦コンクリート振興株式会社（以下、FKK社）に入社されたのである。

わが国の本格的なプレストレストコンクリート（以下、PC）技術は、昭和26年のプレテン桁による長生橋の完成を嚆矢として大発展を遂げた訳であるが、松村さんが社会に出られる頃は未だその技術は緒に就いたばかりであった。したがって、その時点で創設後間もない、かつ、フランス色の濃いFKK社に就職することは、指導教授の推薦であったにせよ大英断であったと推察される。入社当時、日本国有鉄道からの土木技術者は、猪俣博士をはじめ何人かおられたが大学新卒者としては第一号のはずである。

ところで、PC技術はフランス、ドイツを中心とするヨーロッパで発展していたことから、わが国に導入される技術のほとんどすべてがフランスおよびドイツのものであった。当時、世間では外国語といえば英語の時代であったので、最新のPC技術を学ぶにはフランス人技術者によるフランス語の講演会に出席することが必要であった。第一筆者が昭和37年に社会に出てこのような講演会に出席すると、フランス人技術者（ムッシュ ボネと記憶している）によるフランス語での講演会においても、なぜか英語が堪能のはずの松村さんが大活躍されていた。当時プレキャストセグメント工法によるフランスでの大規模な橋梁建設などについては、松村さんを通じて大いに勉強させていただいた。われわれは当時から松村さんのことを「松村タイネンさん」と呼んで尊敬していたのである。FKK社はフランスのフレッシュ工法の振興を図る会社であり、わが国においてPC工法といえばフレッシュ工法が標準とされるまでに普及発展したことは松村さんのご貢献が極めて大きかったものと拝察される。

FKK社では1968年に「フレッシュ技士」の資格制度を設立した。当時、わが国では、東海道新幹線（1964年開通）や東名高速道路（1969年開通）などのビックプロジェクトが完成した時期であり、同時にPC技術者の不足



FKK社役員時代の松村氏

が危惧された時代であった。制度発足以来、PC業界におけるこの資格への信頼度は高く、この制度がわが国のPC技術の発展に大きく寄与してきたが、PC技術の一層の発展のためには、社団法人であるPC技術協会（現PC工学会）自身がPCに関する資格制度を持つことが必要であると認識されるようになってきた。しかしながらPCに関する資格制度はFKK社がすでに5000名以上の資格者を擁して技術界に役割を果たしていた状況で、公とはいえ類似の新しい資格制度を創設することは容易なことではなかった。そこで、PC技術協会がPC技士の資格制度を発足させるにあたり、第一筆者がフレッシュ技士の創設者であったFKK社の藤田亀太郎社長（当時）にフレッシュ技士制度のノウハウに関する助言をお願いしたところ快諾され、それ以降は松村さんの協力を得て無事にPC技術協会のPC技士制度が平成5年（1993年）に創設されたのである。松村さんのお陰で、フレッシュ技士の資格保有者には全員PC技術協会の特別選考試験を受験してもらい一挙に多数の合格者を選定することができた。なお、従来からのフレッシュ技士制度は継続することとし、その代わりにPC技士試験合格者は講習のみでフレッシュ技士の資格が得られるようになった。このような変更は松村さんの大いなるご努力の結果である。

松村さんは文字どおりFKK社の顔としてのみならずわが国のPC技術の育ての親の一人として長年活躍されてきた。1963年には香港初のPC橋である沙田橋の設計施工指導、1980年には著名なPC斜張橋である台湾の光復橋の設計施工指導など海外工事でも活躍された。平成2年にはFKK社の取締役、同6年に専務取締役就任され同15年に47年間のFKK社一筋の勤務を終えられた。PC技術協会では昭和47年～50年に監事、平成3年より前述のPC技士委員会委員としてこの制度の創設に大きく寄与された。これらのご業績により、平成16年に名誉会員に推挙された。平成23年11月のご逝去の報に接したことを機に、ここに改めてご生前のご活躍とご指導に感謝を申し上げ、ご冥福をお祈りする次第である。

【2012年3月23日受付】

*1 Shoji IKEDA：横浜国立大学 名誉教授

*2 Takao FUJITA：極東鋼弦コンクリート振興(株) 代表取締役会長